

睡眠時ブラキシズム診断システムの社会実装

山口泰彦

北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野冠橋義歯補綴学教室

歯科臨床における睡眠時ブラキシズムの診断は従来、臨床徴候を基に行われ、その信頼性は必ずしも高くなかった。より正確な診断を行う上では睡眠中の咀嚼筋活動を実際に測定する必要があった。我が国では従来、ポータブル筋電計を用いた研究が盛んに行われおり、1990年～2019年7月までに発表された論文51編中28編（MEDLINE）が我が国の研究者によるものである。こうした背景をもとに産学共同で電極、筋電図アンプ、データ記録部を一体化した筋電計が開発され患者自身が自宅で測定可能なデータロガータイプの超小型ウェアラブル筋電計が実用化され2018年12月医療機器認証を経て、2020年4月に「睡眠時歯科筋電図検査」として保険収載され日常臨床でも測定に基づく睡眠時ブラキシズムの診断が行われるようになった[1, 2]。つまり長年の研究成果をもとに診断機器が実用化され診断精度の向上に大きく寄与している。こうした状況は国際的にも他に例がない。

ブラキシズムには、日中覚醒時ブラキシズムもあり、その影響は睡眠時ブラキシズムと同様、注目されており、その実態解明は急務である。ウェアラブル筋電計により実際に覚醒時ブラキシズムを測定した論文は2011年以降11編あったが、そのうち9編が日本の研究者によるものであり、この領域も我が国が牽引していると言える[3]。これらの実績を発展させ、ブラキシズム全体の更なる実態解明と適切な管理法の確立に向け研究を展開してゆくことが今後の課題である。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反状態はありません。

参考文献

- [1] Yamaguchi T, et al. J Prosthodont Res. 62:110-115, 2018 (IF: 4.64, 被引用回数 16)
- [2] Maeda M, et al. J Prosthodont Res. 64:90-97, 2020 (IF: 4.64, 被引用回数 11)
- [3] Yamaguchi T, et al. Cranio. 1:1-9, 2020 (IF:2.02, 被引用回数 13)